

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	潰瘍性大腸炎患者が大腸全摘術を決心した理由と術後の身体的変化の体験における探索的研究
作成者（著者）	佐藤, 美和
公開者	東邦大学
発行日	2023.09
掲載情報	東邦大学大学院看護学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨.
資料種別	学位論文
内容記述	主査：伊藤桂子 / タイトル：潰瘍性大腸炎患者が大腸全摘術を決心した理由と術後の身体的変化の体験における探索的研究 / 著者：佐藤美和 /
著者版フラグ	none
報告番号	32661甲第1089号
学位授与年月日	2023.09.25
学位授与機関	東邦大学
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD28223533

審査報告書

学籍番号：ND15002 氏名：佐藤 美和

論文題目：潰瘍性大腸炎患者が大腸全摘術を決心した理由と術後の身体的変化の体験
における探索的研究

審査日時：2023年9月6日 16:00～17:30

審査場所：402 セミナー室

審査員：主査 伊藤桂子 副査：湯浅玲奈、村上好恵

1. 審査報告

本研究の目的は、潰瘍性大腸炎の外科的治療である大腸全摘術・回腸囊肛門（管）吻合術を受ける患者が求める看護支援を見出すために、患者がどのような理由で手術を決心し、術後どのような身体的変化を体験しているのかを明らかにすることである。

文献検討では、非特異性炎症性腸疾患である潰瘍性大腸炎は、炎症抑制効果が乏しい場合や大腸穿孔・大量出血・大腸がん発生の場合は外科的治療が推奨されているが、患者の多くが内科的治療に望みを持つため、患者にとって外科的治療選択の優先度は低く、外科的治療に踏み切ることが困難であると報告されていることが記述され、手術を躊躇している患者に対してどのような看護を提供すべきなのか明らかではないという研究課題が明確に示されていた。

研究方法は、2期分割手術前後の半構造化面接、参与観察、インフォーマルインタビューによる探索的アプローチである。研究対象者はIBDを専門とする医師が常勤し、潰瘍性大腸炎の手術を年間約19件以上行っている関東圏内の3施設で、外科的治療を受ける患者5名である。半構造化面接、参与観察、インフォーマルインタビューで得た質的なデータを、個別および術式ごとに分析して、研究課題を明らかにするための工夫がされていた。

研究結果から、推奨されている外科的治療を受けることを躊躇している患者に対して、術後の症状改善や排便コントロールの再獲得などの可能性について情報を提供し、希望がもてるような看護支援を行う必要があることが示唆された。

2. 質疑応答

上記に対して、研究目的、研究意義、研究結果、考察において、記載が統一されていない箇所、患者が手術を決心した理由に影響する背景の記載が不十分な箇所があるとの指摘があったが、口頭で適切に説明された。

3. 審査結果

本研究は独創性、新規性があり、長期に渡るデータ収集により患者の実態が明らかになり、見出された看護支援を、患者への支援に活用する価値があると判断される。

以上のことから、修正すべき箇所はあるが、審査基準を満たしていることから、審査員全員一致で合格であると判断した。

修正事項

- 研究目的、研究意義について、何をどこまで明らかにするのが読み取れるように整理する。
- 患者が手術を決心した理由に影響する背景の記載を追加する。
- 手術を決心した理由、術式ごとの術後の身体的変化について、分析から明らかとなった結果に関する記述を追加する。